

高校生のときにわずか二年間、シンガポールに住んだのが海外生活経験のすべてだが、「それが考え方の転換点になった」と瀧さんは言う。

## 日本の「過去」に出会った

千葉県の公立高校で二年生だった彼女が渡航したのは一九九二年二月。一九四二（昭和十七）年二月に旧日本軍がシンガポールを占領したのからちょうど半世紀で、テレビも新聞も街の人々の会話もその話題で一色だった。「とにかく気まずかったです。それまでは日本がかつてアジアで何をしてきたか、何も知らない日本の高校生でしたから、まず驚いて、なぜ？」と疑問を持ちました」

千葉で通っていた高校の先生に手紙を書く時、当時の日本がアジアで何をしたかを解説する本が送られてきた。シンガポールは十九世紀からイギリスに統治され、中国系、マレー系、インド系などの人々が暮らしていたが、日本軍は数千人とも数万人ともいわれる数の中国系住民を虐殺した。最も人口が多く「最も抗日的だった」とされる中国系住民を「半分には減らすため」だったともいわれている。

「中国系、マレー系、インド系の人々の間で仲が悪いのは、日本占領下での待遇の差が遠因だとも聞きました」と瀧さん。

「シンガポールは高校生がひとりりで街を歩けるほど治安のいい安心な国ですが、一方で犯罪については厳罰主義で、むち打ち刑の写真が公開されたりもします。こういう厳罰主

## 人生を変えた二年間



シンガポール時代、友人の運転手さんの家に生まれた赤ちゃんに会いに行った

たき あきこ  
**瀧 亮子さん**

大福書林 代表取締役

今月の

**顔**

1974年、千葉県生まれ。千葉県立国府台高校の2年生だったときに家族でシンガポールに移り、カナダ系インターナショナルスクールに通った。2年間かけて12年生を修了して帰国、海外での単位を換算して国府台高校の卒業証書も手にした。帰国生枠で中央大学文学部に入学、卒業後はいくつかの出版社に在籍したのち、2015年に独立して大福書林を設立、毎年2～3冊を出版している。

<https://www.daifukushorin.com>

義も旧日本軍のやり方から学んだといわれたりするんです」

「日本が犯した過去の罪を見ないで暮らすこともできたかもしれない。けれど瀧さんは「自分で受け止めて学ぶことが大切」だと考えた。そしてこう言う。

「あの経験がなかったら、よく知らず、向き合わず大人になっていたかも。それはすごく怖いことですよね」

## 授業で隣にいたのは小学生

ところで瀧さんがシンガポールで通ったのは、設立されて間もなかったカナダ系インターナショナルスクールだった。当初は小学生レベルの「English as a Second Language (ESL)」クラスに入り、四歳違いの弟よりも年下の男の子が隣に座っていた。

「英語ではかけ算も、小学校の理科の実験に必要な単語もわからなかったので、仕方なかったんです。でも、日本の同級生たちは大学に進学していくのに、私はこのままど何年も遅れそうで、何をやっているのかと思いました」

彼女はESLの授業でどんどん学年を飛び越え、進級していく。だがそれでも卒業まで一年間余計にかかった。

「留年はシヨックでしたね。カナダ人の先生は『私も大学に入る前に何年も時間をかけたよ。山登りしたりして』と言ってくれたりするんですけど、なんの慰めにもなりませんでした。私がこだわっているのは日本での常



東京・吉祥寺の新古書店「百年」に並んだ、大福書林の本



現在の瀧さん。著者たちと中国玩具の本を製作中（右端が本人）

識に過ぎないとわかっていましたけど、日本に戻れば高校留年というだけでハンディになると焦っていました」

要するに彼女の場合、高校二年生まで国内で暮らしていたなかで「日本の常識」が身につけていたのだ。「それが裏返された二年間でした」と言う。

## 好奇心から気づきへ

インターナショナルスクールで周りを見ると、韓国や台湾出身の子も多かった。「日本にはない徴兵のある国が、身近にいくつもあのだと知りました」

さまざまなることを考えるようになった瀧さんは、高校時代にはシンガポール周辺の各国を、また大学時代にもアジアや東欧、北欧など「なかなか行けそうにないところから、二十〜三十カ国くらい、なるべくひとりで長めに」旅した。路上から人々の暮らしや手仕事、地形や建築物などを観察し、異なる文化、歴史、社会に接して「なぜ？」と思うことから、好奇心が発動する。そして学ぶ。学べば学ぶほど、「自分もその一部として連なっている」ことに気づく。

それは現在の仕事でも同じだ。リスボンの地下鉄についての本を出したときには、なぜポルトガルが栄えたのかを考え、奴隷制に関心を持った。

大福書林という社名は中国語を話す人にも親んでもらえるようにと考えたのだそうだ。

（取材・文 古家淳）